

令和7年度

少年の主張

埼玉県大会

作品集



主催：埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・
独立行政法人国立青少年教育振興機構

協賛：Humming Bird 未来基金・埼玉キワニスクラブ・羽石電気工業株式会社・
森乳業株式会社・株式会社埼玉りそな銀行・公益財団法人埼玉 YMCA・
株式会社テレビ埼玉・株式会社埼玉新聞社



埼玉県マスコット
「コバトン」「さいたまっち」

大会発表者の皆さん

小学生の部



あんどう そうすけ
安藤 颯佑 さん



いとう まなみ
伊藤 愛美 さん



にしかわ かずき
西川 和希 さん



ますだ くれな
増田 紅 さん



やまだ ゆずな
山田 柚奈 さん

中学生の部



いけだ みか
池田 実花 さん



さいとう のぞみ
齊藤 希美 さん



たかはし りはく
高橋 李珀 さん



たけうち はると
竹内 晴人 さん



たけだ ゆあ
武田 結葵 さん

高校生・ 一般の部



おおた かすみ
大瀧 佳澄 さん



こう きょうきょう
黄 京京 さん



こやなぎ さやか
小柳 紗弥加 さん



しょう せりな
荘 世莉奈 さん



なかい ゆあ
中井 優杏 さん

はじめに



皆さん、こんにちは。去る8月31日に、44回目となる「少年の主張埼玉県大会」を青少年育成埼玉県民会議、埼玉県、埼玉県教育委員会、及び独立行政法人国立青少年教育振興機構の主催で行いました。

今回の大会には33,287名の応募があり、その中から15名が発表者に選ばれました。発表者の皆さんは、社会の様々な出来事や日常生活を通じて得た気付きや考察を自身の言葉でまとめ、堂々と発表されました。

発表内容には、自分の覚悟や決意を表明するもの、現代社会が抱える課題や未来への提言が数多く盛り込まれており、大変頼もしく感じました。命や多様性の尊重、国際問題、家族や友達とのつながりなど、幅広いテーマが取り上げられ、それぞれの主張に発表者一人一人の真摯な思いが込められていました。

発表者の皆さんは、先生や御家族に支えられながら、練習を重ねてこられたことと思います。この経験を通じて今後も広い視野と柔軟な発想を育み、物事を論理的に考えるとともに、自らの主張を明確に伝える力を身に付けてほしいと思います。

そして、この大会への参加を通じて得た考えを更に深め、夢や希望に向かって果敢に挑戦してほしいと願っています。皆さんの活躍を大いに期待しています。

この冊子は、大会で発表された15名の主張を作品集としてまとめたものです。是非多くの方々にお読みいただき、青少年の夢や希望、そして社会に向けた熱い思いに共感していただければ幸いです。

結びに、日頃から青少年の健全育成に御尽力いただいている皆様に深く感謝申し上げますとともに、大会の開催に御協力いただいた皆様に心からお礼を申し上げます。

令和7年12月

青少年育成埼玉県民会議会長

埼玉県知事 大野元裕

目次

- はじめに（青少年育成埼玉県民会議会長 埼玉県知事 大野 元裕）
• 大会の模様…………… 1 ページ

（小学生の部）

最優秀賞	未来をつくるぼくたちの声を世界へ 加須市立大利根東小学校6年	あんどう そうすけ 安藤 颯佑さん …………… 3 ページ
優秀賞	農家の可能性 三郷市立新和小学校5年	にしかわ かず き 西川 和希さん …………… 4 ページ
優良賞	人生とは何だ？ 春日部市立武里小学校6年	いとう まな み 伊藤 愛美さん …………… 5 ページ
優良賞	私の第三の居場所「風の里」 ふじみ野市立東原小学校6年	ますだ くれな 増田 紅さん …………… 6 ページ
優良賞	心のつながり 久喜市立清久小学校6年	やまだ ゆず な 山田 柚奈さん …………… 7 ページ

（中学生の部）

最優秀賞	広がれ優しい世界 草加市立谷塚中学校1年	いけだ み か 池田 実花さん …………… 8 ページ
優秀賞	知ってもらふこと 三郷市立瑞穂中学校3年	たけうち はる と 竹内 晴人さん …………… 9 ページ
優良賞	「知る」ということ 草加市立両新田中学校3年	さいとう のぞ み 齊藤 希美さん …………… 10 ページ
優良賞	辛かった日々を乗り越えて 和光市立第二中学校3年	たかはし り はく 高橋 李珀さん …………… 11 ページ
優良賞	素直に言えない感謝の気持ち 三郷市立北中学校3年	たけだ ゆ あ 武田 結葵さん …………… 12 ページ

（高校生・一般の部）

最優秀賞	無関心と感謝のはざままで 西武学園文理高等学校2年	おおがた か すみ 大潟 佳澄さん …………… 13 ページ
優秀賞	「やさしい日本語」を広めたい 筑波大学附属坂戸高等学校3年	こやなぎ さ や か 小柳 紗弥加さん …………… 14 ページ
優良賞	命は軽くない 埼玉栄高等学校2年	こう きょうきょう 黄 京京さん …………… 15 ページ
優良賞	間違い探し 埼玉県立浦和商业高等学校1年	しょう せ り な 荘 世莉奈さん …………… 16 ページ
優良賞	世界の人々とどう向き合うか 埼玉県立和光国際高等学校2年	なか い ゆ あ 中井 優杏さん …………… 17 ページ

- 特別賞の紹介…………… 18 ページ
• 講評（株式会社埼玉新聞社執行役員編集局長 砂生 敏一氏）…………… 20 ページ
• 大会の概要…………… 21 ページ

大会の模様



開会の挨拶
(青少年育成埼玉県民会議 小松弥生副会長)



会場の様子



発表の様子（小学生の部）



発表の様子（中学生の部）



発表の様子（高校生・一般の部）



審査の様子



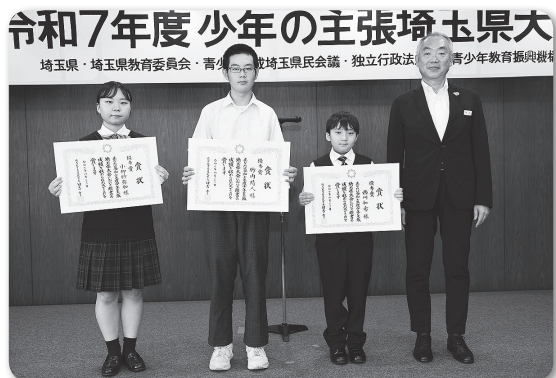
ミニコンサートの様子



講評
(株式会社埼玉新聞社 砂生敏一執行役員編集局長)



最優秀賞【知事賞】の授与
(青少年育成埼玉県民会議 柿沼トミ子副会長)



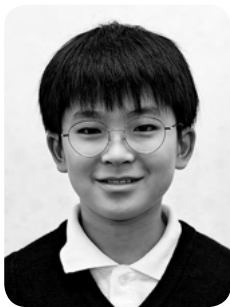
優秀賞【教育長賞】の授与
(埼玉県教育局 田中邦典県立学校部長)



優良賞【県民会議会長賞】の授与
(青少年育成埼玉県民会議 芦澤吉一副会長)



記念写真



小学生の部 最優秀賞

未来をつくるぼくたちの声を世界へ

加須市立大利根東小学校 6年 安藤 颯佑

みなさん。大人の皆さんが一生懸命に、ぼくたちを守り、未来のために導いてくれていることに、心から感謝しています。

でも、それと同じくらい、ぼくたち子どもも、日々たくさんのことを感じ、考えています。しかし、その思いや考えが、大人の世界にきちんと届いているかというと、そうは感じられません。だからこそ、ぼくは思います。子どもの意見がもっと社会に活かされる、そんな未来になってほしいと。

ぼくがそう強く感じたのは、ある日、両親と一緒に選挙に行った時のことです。投票所に入ると、大人しかいませんでした。静かで、真剣な雰囲気に包まれていましたが、どこかさびしさを感じました。

「ここには、子どもの考えは関係ない」そんな空気を感じたのです。けれど、子どもの意見が、少しでも政治や社会に反映されるようになったらどうでしょう。自分の考えを小さいうちから持ち、言葉にしていく経験があれば、大人になったとき、自分の意思で選挙に行こうと思える若者が増えると思うのです。

ぼくの学校では、加須市で初めて、広島のアオギリと長崎のクスノキ、2つの被爆樹木2世の苗木を植えるセレモニーを行いました。あの日、ぼくは、小さな苗木を見つめながら、平和の大切さを心から感じました。

「戦争は、絶対に繰り返してはいけない」

その思いが、胸に強く刻まれたのです。

土を掘っている時、隣の友だちが、静かにこう言いました。

「この木が大きくなったら、みんなが平和の大切さを思い出せるかな？」

ぼくは、深くうなずきました。周りの子たちも、同じ気持ちだったと思います。あの苗木と同じように、ぼくたちの平和への願いも育ち、未来へと広がっていく。その思いは、今もずっと変わりません。でも、現実の世界では、自分の意見を言うのが恥ずかしかったり、発言力の強い人の声ばかりが通ったりすることもあります。

けれど、どんなに小さな意見にも、価値があります。みんなで聴き合い、考え合い、必要であれば社会へ、世界へと伝えていくことが大切だと思います。昨年、国語の「よりよい学校生活のために」の授業で、ぼくは登下校の様子を見直そうと提案しました。一部の児童が1列で歩けなかったり、白線からはみ出したり、地域の方に元気にあいさつできなかったりしていたからです。ぼくは、「安心・安全登下校コンクール」を企画し、各班長が審査員になって、安全な歩き方やあいさつの仕方をお互いに評価し合うという活動を提案しました。担任の先生を通じて、校長先生にも承諾していただき、今、実現に向けて動き出しています。自分の意見が、学校の課題を少しでもよくする力になる。その実感が、ぼくにとって大きな自信になりました。大人の皆さんが、子どもの声に耳をかたむけ、共に考えてくれることで、もっと暮らしやすく、もっと楽しい社会ができると、ぼくは信じています。

ぼくたちが夢見る未来は、平和で、みんなの意見が尊重される社会です。だからこそ、ぼくたち子どもは、勇気をもって意見を伝え、たがいに耳をかたむけ、支え合うことを今から始めたいのです。その輪が、学校から地域へ、地域から県、国、世界へと広がっていく。きっと、未来は変えられます。

どうしても、この言葉だけは、伝えたいと思います。

『小さな声でも、世界を変えることができる』

勇気を出して伝えることが、世界を変える第一歩です。ぼくたちの声で、輝く未来をつくっていきましょう。

大会の感想や今後の抱負

ぼくの考えを多くの人に聞いてもらえて、うれしかった。そして、他の人の考えを聞くことで、新しいことを知ることができた。これからも意見を伝えたり、聞いたりできる大人になりたいと思う。



農家の可能性

三郷市立新和小学校 5年 西川 和希

「将来の夢は何ですか。」

これは、ぼくたちが最もよくうける質問の一つだ。将来、何の仕事がしたいか、皆さんは決まっているだろうか。ぼくはまだ決まっていない。しかし、候補に挙げているものがある。それは、農家になることだ。

「お米ってこんなに高くなったの。」

お母さんが言った一言。買い物についていったぼくはその値段にあまりピンときていなかったが、この言葉がなぜか心に残った。それから、買い物についていく度に、お米の値段を気にするぼくがいた。去年の夏の終わり頃、スーパーからお米が消えた。キャベツの値段がぐんぐん上がっていく所を見た。お米や野菜に関するニュースが目につくようになった。備蓄米、野菜の値上がり、ぼくたちの「食」は今後どうなっていくのかと疑問を持った。

ぼくのおじいちゃん、おばあちゃんは農家として仕事をしている。朝から晩まで一生懸命に働くおじいちゃんたちは言った。

「あまり稼げないから、農家にはならなくていいんだよ。」

農家という仕事はだれが担っていくものなのだろう。ならなくていいという言葉をもそのまま受け止めていいのだろうか。農家という仕事は高齢な方が担っているイメージが強く、若い人たちが就く仕事の印象ではない。若い人たちはなぜ農家という仕事をしないのか、その理由を考えてみた。

現代の仕事の環境と農家の仕事の環境が異なっているということに目をつけた。会社や自宅にはエアコンが入っており、快適に仕事をするができる。農家は外での作業が多く、快適とはいえない環境が多いと感じている。整った環境とそうでない環境では、誰もが整った環境で仕事をしたいと感じるだろう。

農家は、人が生きていく上で必要な衣食住の「食」を担う仕事だ。ぼくたちはものを食べなければ生きていけない。農家がなくなってしまったら、どうすればよいのだろうか。現代の社会にはロボットやAIなど便利なものがたくさん存在する。20年後、技術の進歩によって現代の約50パーセントの仕事がなくなるといわれている中、ロボット

が農家の代わりに野菜やお米を自動で作る時代が来るのかもしれない。

ぼくはおじいちゃんたちの仕事の手伝いをしたことがある。ブロッコリーの種まきや水やり、雑草取りだ。その作業はとても疲れるし、服も汚れた。力仕事が多かったり、同じ姿勢を取り続けたりすることもあり、農家の仕事はとても大変なんだと実感した。しかし、きれいになった土から伝わるにおいや感触に達成感も生まれた。またやってみたい、そんな気持ちが確かにあった。ぼくは、この気持ちを世の中の人たちにも知ってほしいと感じている。農家に対する悪い印象だけではなく、よいこともあることをわかってほしいのだ。

改めてぼくは、農家は必要だと思う。食材がなければ生きていけない。「食べる」という行為は人が生きていく中で幸せを感じる瞬間である。幸せな状況を作るには人が動いていなければならない。ロボットやAIに全てを任せてはいけけないのだ。ただ、全ての作業を今までと同じように作り続ける必要はないとも感じている。今、スマート農業と呼ばれる取り組みが注目を集めている。ロボットやAIの機能を使った最新技術の農業だ。人が入っていけないせまい場所にドローンを使って肥料や農薬をまいたり、天気や栽培の記録をデータに残して今後の育成の参考にしたり、効率的に仕事をするための運用が始まっている。性別や年齢、それまでの経験に関係なく、快適に農業に取り組める可能性が出てきているのだ。

人とAIが手を取りあう未来。これは誰もが夢見る世界だろう。だからこそ、その夢見る世界の中に、「農家」という仕事を加えていきたい。ぼくたちの生活になくってはならない仕事の一つとして。

大会の感想や今後の抱負

大きな舞台で緊張しましたが、自分の主張を伝えられて良かったです。また、他の人たちの主張に強く共感しました。農家を通して、食の大切さをたくさんの人たちに伝えていきたいです。



小学生の部 優良賞

人生とは何だ？

春日部市立武里小学校 6年 伊藤 愛美

みなさんは人生って何だと思いますか。私は「人生とは、プラスとマイナスのくりかえし」だと思っています。そう考えたときに大切なのは、プラスもマイナスもどちらも必要だから、一日一日の時間を大切に生きていくことだと思うのです。

私たちは生きていく中でいろいろなことが必要となります。お金・水・食べ物・愛・コミュニケーション力などです。必要なものは人それぞれですが、きっとみなさんもこういう必要なもの1つくらいは当てはまると思います。

しかし、私が一番大切だと思うのは「プラスのでき事とマイナスのでき事」です。きっとみなさんは「何で？」と疑問に思うかもしれません。しかし、私はこれが絶対に一番だと思います。そのように考えるようになったきっかけは、5年生のときの道德の授業でした。

私たちが住んでいる国は、日本。日本では食べ物がなくて困るとか、お金がなくて困るとか、あまりないように思います。一方で、世界にはお金がない人々もいます。何も食べられなくて死んでしまう人もいます。そんな中でも生き延びている人がいます。

みなさんは、そのような貧しい生活をしたいと思いますか。たしかに、生きていくことが大変なのはよくわかりますし、できればそのようなくらしをする人が1人でもいなくなったほうがいいと思います。それでも、お金がない国・食べ物がいない国で生きていくことが「絶対に不幸だ」と決めてしまってもよいのでしょうか。私は思いません。

道德の授業では、ブータンの国のワンチュク王の話から、「心の龍」についてまなびました。ワンチュク王は、東日本大震災の5ヶ月後に被災地にやってきて、被災して心が傷ついている子どもたちに、次のようなお話をしたそうです。

「みなさんの心の中には、人格という名の龍がいます。その龍は、経験を食べて大きく成長します。龍は経験を食べれば食べるほど、強く、大きくなっていきます。人は経験を糧にして、強くすることができるのです。」

ワンチュク王はこのような話を、ブータンの子どもたちにもするそうです。そしてブータンの子どもたちは、心の龍を感じ、心を育てていくそうです。

ブータンは日本に比べれば、けっして豊かなくらしをしているとは言えません。でも、心の龍を大切に育てているので、ブータンの人たちは「自分はとても幸せだ。」と思っているそうです。それは、つらいこと・苦しいこと・貧しいことも、全て龍が食べる経験で、自分の心を成長させていると考えることができるからだと思います。

この学習から、私がもしお金がない国に生まれていたらどうなっていたのかを考えました。きっと、私ならがんばって生きると思います。お金がないってところで十分不幸せですが、「心の龍」を育てることができれば、その不幸せがいいことにつながることはないかと思います。だからお金があるとか、美味しい食べ物があるとかそういうことが幸せではなくて、プラスもマイナスも全てふくんだ経験を得ることが幸せなのだと思います。

私がずっとプラスの人生を歩んできたなら、もちろん幸せと感じるはずですが、しかし、つまらないとも思うはずですが。それは「心の龍」が育っていないと感じるからだと思います。だから、マイナスなことは、私の成長にとってとても必要だと思います。

マイナスなことが起きたら、それは経験になる。経験は心の龍が食べて、大きな成長につながる。そうして、強くなって、いつかマイナスだったことは、プラスの経験に変わっていく。そう信じるのが人生の中で一番大切だと思います。

私たちが生きていられるのは決して当たり前ではありません。き重なことだと思います。だから私たちが生きている時間を大切に、すべてを経験に変え、心を育てていきたいと思っています。そうしてマイナスもプラスも全てを受け入れて、心を強く大きく成長させて楽しく生きていこうと思っています。

大会の感想や今後の抱負

私は将来助産師になりたいです。今回の経験で、自分の気持ちを言葉にする大切さや、人の気持ちに耳を傾ける力を学ぶことができました。これからも「心の龍」を育てていきたいです。



私の第三の居場所「風の里」

ふじみ野市立東原小学校 6年 増田 紅

私は、毎日学校が終わると、家に帰らずに、風の里にあるアフタースクールに下校します。アフタースクールとは、学童保育室と同じようなものです。私が小さい時から通っている保育園と同じ敷地内にあります。小さい頃から12年間、毎日のように過ごしている大切な場所です。

私は、風の里が大好きです。理由は三つあります。一つ目は風の里には0歳の赤ちゃんから小学6年生までいるので、色々な年齢の子と仲良く楽しく過ごせることです。私には4つ上の姉と3つ下の妹がいるので、家でもたくさん一緒に遊んだり喧嘩をしたりします。しかし、風の里にはもっと幅広い年齢の子たちが過ごしているので、一緒に遊べる機会があります。特に私は、小さな子と遊ぶことが大好きなので、夕方、一緒に絵本を読んだりブロックをしたりして過ごすことがとても幸せな時間です。また、たくさんの小学生がいろいろな学校から通っているの、自分が通っている学校以外にも友達がたくさんできます。東台小学校は今年、東原小学校と統合しましたが、私には東原小学校にも友達がいたので、他の子より不安が少なかったです。

二つ目は、色々な行事があることです。敬老の日が近づいたら、毎年おじいちゃん、おばあちゃんをお迎えしての会があります。昔の歌を覚えて歌ったり、手話をしたりすると、とても喜んでくれて、私も嬉しくなります。自分のおじいちゃん、おばあちゃん以外の高齢者と触れ合う機会はほとんどないので、私は毎年9月が楽しみです。また、冬にはこま勝負があります。こまは毎年自分で色を塗ります。みんなで熱中して白熱した勝負になり、寒さも忘れてしまうくらいです。こまは、練習すればするほど、上手に回せるようになります。努力をすれば成功につながるということを、私は風の里からたくさんの機会を通して教えてもらいました。

三つ目は先生方が温かいことです。私が学校から風の里に帰ると毎日「お帰り」と出迎えてくれます。私が小さいころからたくさんお世話になっ

ている先生もいます。10年以上見守ってくれて、父母のように温かく接してくれます。時には厳しく指導もしてくれてはげみにもなります。また、コックさんも大好きな先生です。コックさんは、調理をするだけでなく、美味しく食べているか確認に来てくれたり、新しいメニューも考えてくれたりします。赤ちゃんだった私の離乳食から、今も下校後のおやつを作ってくれて、私の成長を支えてくれています。

私には、家・学校以外に風の里というとても大事な居場所があり、風の里のおかげでたくさんの人と出会うことができました。流しそうめんや、自然の力だけで作る焼きいもなど、家庭でも学校でも体験できないことができたり、一人ではつまらないけれど、友達や先生と一緒にいることで、楽しい経験を積むことができました。家や学校でいやなことがあっても、風の里に居ると安心できることもあります。そのような居場所があることを私はとても幸せに思えて、風の里の友達や先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。あと半年しか通えないのでさみしい気持ちもありますが、一日一日を大切に過ごして、たくさんの思い出を作りたいです。そして、このとても貴重な場所を大切にしていきたいです。

今、世界では、学校に行きたくない、家にも帰りたくない、という子供たちがたくさんいると聞いています。そのような子供たちには帰りたい場所、自分の居たい場所がありません。私は、そのような人たちが帰りたいと思う場所、風の里のような第三の居場所が、全国に広がることを願います。

大会の感想や今後の抱負

自分の主張をたくさんの人に聞いてもらえてうれしかったです。大会にも風の里の先生や学校の先生が応援に来てくれて、あらためて私はたくさんの人に見守られているんだと実感しました。



小学生の部 優良賞

心のつながり

久喜市立清久小学校 6年 山田 柚奈

私には、大好きなひいおばあちゃんがあります。

ひいおばあちゃんは93歳。若いころにだんなさんをなくし、1人で3人の子どもたちを育ててきた、強くてやさしい人です。ひいおばあちゃんや家族から昔の話を聞くと、「すごいなあ。」と思うことばかりで、心から尊敬しています。私にとって大切な存在で、思い出もたくさんあります。

そんなひいおばあちゃんが脳こうそくで倒れたと聞きました。おどろきと心配で胸がいっぱいになりました。家族みんなで会いに行きましたが、その時のひいおばあちゃんは、私たちの顔がはっきりみえず、名前も分からない状態でした。私はどう接していいか分からず、ただ泣くのをがまんして手を握ることしかできませんでした。でもひいおばあちゃんは、「ありがとうね。」

と言ってくれました。私は悲しい気持ちと、少しほっとした気持ちになりました。

ひいおばあちゃんは、いつも優しく話しかけてくれたり、笑顔で見守ってくれたりしていました。元気なころは毎日お散歩に行き、公園でお友達と楽しそうにおしゃべりをしていました。今は外に出るのも不安になっているようです。少しずつ回復してきたものの、記憶があいまいになることも多く、何度も同じことを聞いたり、名前が出てこなかったり。また、生活のかい助はひいおばあちゃんの娘、私のおばあちゃんたち姉妹やおじいちゃんが協力して行っています。みんなで相談しながら、ひいおばあちゃんのためにできることをしている姿を見て「家族ってすごいな。」「自分にはなにができるのだろうか。」と考えるようになりました。

そんな出来事があった後に、家の人と一緒に本を読んで感想を話し合う宿題が出ました。それが、「フレディの遺言」という本を読むきっかけになりました。この本はもし、自分が認知症になったらどうしてほしいかという本人の気持ちが、やさしい言葉でかかれていました。フレディさんは「忘れてしまっても、やさしく話しかけてくれたら

思い出すかもしれない。」と言っていました。その言葉を読んだ時、「ひいおばあちゃんにも、私の声が届くかもしれない。」と思いました。毎日は会いに行けないけれど、会えたときには、やさしく声をかけたり、手をにぎったり、笑顔で話しかけたりしています。話が上手く伝わらないときもあるけど「やさしい気持ちはきっと伝わっている。」と思えるようになりました。

「フレディの遺言」の最後には、「ひととはだれでもやさしさに囲まれていたいと思っている。」とありました。やさしさは言葉や笑顔、行動で相手に伝わるものだから、私はひいおばあちゃんにも家族、友達そして周りの人たちにも、やさしい気持ちで接したいと強く思うようになりました。

色々なことを忘れてしまったとしても、人は人です。その人が生きてきた人生や積み上げてきた時間は、たとえ本人が忘れてしまっても、周りの人の心の中に残り続けます。それを守り、大切にしていかなければいけないのだと思いました。人には人らしく生きる権利があります。病気になっても年をとっても、「なにもわからなくなった人」として見るのではなく、その人の今をきちんと見て大切にする必要があったと感じました。

私にできることは限られているけれど、だれかのことを大切に思い続ける気持ちが一番の思いやりであると私は思います。忘れてしまうことは、とてもさびしいけれど「私はひとりじゃない。」と感じてくれるように心のつながりも大切にしたいです。「あなたがいてくれてよかった。」と思ってもらえるような私にとって世界一すてきなひいおばあちゃんのようにやさしい人になりたいと思います。

大会の感想や今後の抱負

大会に出ることが決まった時は、本当に驚きました。緊張と不安な気持ちもありましたが応援してくれたみんなに感謝し、私の主張した思いが誰かの心に響いてもらえたらうれしいです。



中学生の部 最優秀賞

広がれ優しい世界

草加市立谷塚中学校 1年 池田 実花

「小児病棟」と聞くと、どういうイメージを持ちますか。病気やケガをしている子供達が治療を受けていて、辛いことが多い可哀想な場所というようなイメージでしょうか。私は小さい頃から病気で何度も入院してきました。そんな私が見てきた小児病棟は、とても温かくて優しい世界でした。

私が初めて入院したのは幼稚園に入ったばかりの頃でした。怖くておびえながら連れて行かれた病棟で、私は六人部屋に案内されました。私は早くも家に帰りたくなり、ぐずぐずと文句を言っていました。そんな私に、隣のベッドの子は笑顔で手を振ってくれました。その後もぐずぐずし続ける私に、病棟内にあるプレイルームと一緒に遊びに行こうと誘ってくれた子もいました。でも私はとても機嫌が悪かったので、せっかく誘ってくれたのに断ってしまいました。誘ってくれた子は、嫌な顔は少しも見せずに

「そっか。じゃあ遊びに行きたくなったらいつでも一緒に行こうね。」

と言ってくれました。初めての入院生活は痛くて辛いことの連続でしたが、それでも私が頑張れたのは、同じ病室の子達の優しさがあったからだと思います。そんな入院生活の中で、私の心に深く刻まれた出来事がありました。入院して少したったある日、私は具合がとても悪くなりました。病棟はもう消灯時間が過ぎていましたが、応急処置のため、私のベッドの周りに先生や看護師さん達が集まりました。私は痛くて大きな声で泣き、処置から逃れたくて暴れたので大騒ぎになってしまいました。やっと処置が終わった時、私が騒いだことで同じ病室の子達を起こしてしまったことに気が付きました。みんな私の方を見ていました。きっと眠れなくて迷惑だったと思います。でも、みんなが私にかけてくれた言葉は意外なものでした。

「痛かったね。大変だったね。」

「元気になったら明日一緒に遊ぼうね。」

私はとても驚きました。そして、痛くて怖くて冷えていた心が、じわじわと温まっていたことを今でもよく覚えています。

私はその後も入院するたびに、同じ病棟の子達から優しくしてもらいました。みんな病気で辛い思いをしてきたから、相手の辛さや痛みにも敏感で、苦しんでいる人がいたら手を差し伸べずにはいられないのだと思いました。そんな優しい子達のおかげで、病棟は誰にとっても安心できる場所でした。だから病棟に慣れすぎてしまうと、退院することに不安を感じてしまう子もいて、私と同じ病室の子は退院が決まってもあまり喜んでいま

せんでした。薬の影響でとても小柄なその子は「学校で小さいことをからかわれたことがあるんだ。また言われたら嫌だな。」

と悲しそうに言っていました。他にも、足の病気で歩けなくなり、足に装具を付けていた子は、「変な目で見られるから外に出たくない。」

と言っていました。入院中の子達はみんな、早く回復して退院することを目標に辛くても毎日頑張っています。家族や友達に早く会いたい、また学校に通いたいという気持ちがあるから、一日一日を乗り越えていけるのです。それなのにより早く退院できた先で、冷たい視線や心ない言動が待っていたら、それはあまりにもひどいことだと思います。私は、病気や障がいがある人にもっと優しい世の中になって欲しいと思っています。世の中には病気や障がいがある人がたくさんいます。入院すると色々な人と出会うのでよく分かります。でもなぜか病院の外ではあまり見かけません。不思議です。外は不便なことが多くて外出しにくいのでしょうか。もしかしたらそれだけではなく、周りからどんな風に見られるのだろう、という不安もあるのかもしれませんが。そうだとしたら、それはとても悲しいことです。では私達は病気や障がいがある人を見かけたり、周りにそういう人がいた場合はどうしたら良いのでしょうか。私は、特に何もしなくてもいいと思っています。むしろ特別な目で見たりせず、そのまま当たり前のように受け入れたらいいと思います。なぜなら病気や障がいがある人は特別な人ではないからです。もちろん生活するのに大変なことはあると思いますが、決して可哀想な人たちではありません。それに、程度の差はあっても、どんな人もみんな悩みを抱えて生きています。病気や障がいのあるなしに関わらず、みんなそれぞれの課題と向き合って頑張っているのです。みんな頑張っているのだから、お互いにそれを認め合い、応援し合っていけたら、世の中はきっと私が病棟で感じたような、温かくて優しい世界になると思います。誰もが心穏やかでいられるような優しい世界が、小児病棟だけでなく、あちこちに広がっていくといいなと願っています。

大会の感想や今後の抱負

私は今回の大会で聞いた全ての発表に感動しました。全員が多くの人に伝わるように、一言一言に心をこめていたからです。私も心をこめて発表しました。貴重な体験をありがとうございました。



中学生の部 優秀賞

知ってもらうこと

三郷市立瑞穂中学校 3年 竹内 晴人

「書字障害」「ディスレクシア」という言葉を知っているでしょうか。「ディスレクシア」とは学習障害の一種で、一般的な理解能力などに特に異常はないが、文字の読み書き学習に著しい困難を抱える障害です。

人には得意不得意があります。私は、文字を書くことや読むことが苦手です。小学校の頃から「早く書いてよ」「これ書けないの?」と言われることが沢山ありました。ただその時は気にせず、気づいてもいませんでした。

中2の秋、母から「自分の事をもっと知るために検査を受けよう」と言われました。検査の結果、「書字障害」と『選択性注意困難に伴う読み困難』ということがわかりました。私は実感が全くありませんでした。なぜなら、私は字が全く書けない訳ではないし、文字が読めない訳ではないからです。平仮名や漢字、数字、英語など書けないことはないのです。ただ、頭に言葉が浮かんでも書くのに時間が掛かり漢字は筆順で覚えることができません。

私にとって漢字は図形みたいなもので、文章を書く時、漢字にすることが苦手です。また、書くと文字の大きさや位置がばらばらになり、枠からはみ出してしまいます。文字が沢山書いてある文章を読んでいると文章同士が重なって見え、どこを読んでいるのかわからなくなるのです。このことだけを聞くと「練習すればできる」と思われがちですが、練習してどうにかすることができる訳ではありません。これは脳の特性であり、特性に配慮した合理的配慮や代替方法が必要なのです。言語聴覚士の方からリーディングルーラーを使うと読みやすくなると教えてもらいました。それは、色がついている透明の下敷きみたいなもので、文章にあてて読むと色で区切られて見え、どこを読んでいるのかわかり易くなり文字が重なることはありません。また、「授業中、聞くことと書くことを同時にするのではなく一つの事に集中してみると良い」などのアドバイスももらいました。それを踏まえ学校の先生方とリーディングルーラーの使用や学習の代替方法などについて話し合いました。自分の目指す進路に向けて、自分なりの学

習方法を探し続けたいと思います。

実は私は周りに知られることが嫌だという気持ちがありました。しかし、言語聴覚士の方から『同じ症状の子のためになるよ』と言われ、自分を周りに知ってもらい、理解してもらうことが大切だと考えるようになりました。

私の周りには「書字障害」を理解していない人、知らない人がたくさんいます。「ディスレクシア」「書字障害」の割合は、世界の人口の約7%、日本だとおよそ3%と言われています。中でも有名なのがアメリカの人気俳優トム・クルーズです。彼は7歳の頃に診断を受け、公表することで世界に「読み書き障害」という言葉が広がっていきました。

トム・クルーズは台本を覚えるとき、読むことが困難な為、人に音読してもらい覚えているそうです。これも代替方法の一つです。その他にも著名人の中に読み書き障害の人が大勢います。映画監督のスピルバーグ、俳優のオーランドブルーム、キーラナイトレイなどです。みな、学習やいじめに苦しみ、転校を繰り返したりしていたそうです。トム・クルーズはたくさん苦勞していたからこそ、同じ症状で苦しむこどもたちの支援や共感の輪を広げるために公表に踏み切ったのです。

私は合理的配慮や代替方法を使うことが当たり前になって欲しいと思います。それにはまず、みんなに知ってもらうことが必要だと思います。4月、クラスに話したことで、知らなかった人が読み書きできることが当たり前ではないとわかってくれて、好意的に話しかけてくれるようになりました。代替方法を行う時もそれが当たり前かのようにできています。知ること、知ってもらうことが大切なのだと私は思います。

大会の感想や今後の抱負

大きな大会で話すということにとっても緊張しました。自分の主張を沢山の方に聞いてもらうことで、私と同じような人の力になれるといいなと思います。貴重な経験をありがとうございました。



中学生の部 優良賞

「知る」ということ

草加市立両新田中学校 3年 齊藤 希美

你好。皆さんは中国語を話したことがありますか？話したことはなくても、公共施設の掲示板などで見たことがあるかもしれません。

私には中国出身の友達があります。私はその彼女から、いろいろな事を学びました。彼女と知り合ったのは、初めて同じクラスになった中学2年生の頃です。彼女は教室で、黙々と折り紙をしていました。彼女が折っていたのは翼を広げたドラゴンなど複雑なものばかりです。最初に見たときはその細かさに驚き、手先の器用さに感動しました。彼女は小学5年生の時に日本へ来て折り紙に出会い、日本の文化に関心を持ったそうです。それで私は「もっと彼女の事を知りたい」、そう思うようになりました。まず、私が話しかけて彼女が相槌で返す、というやりとりが多くなってきました。でも、私はあまり会話が得意な方ではないのと、話題が限られてきて彼女と話せる機会がだんだん少なくなっていきました。私は中国語が分からないし、彼女に気を遣わせてしまっている感じがして申し訳なくなりました。彼女は日本の文化、そして日本語を学んでくれている。それなら私も中国の言葉を学べば、楽しい会話が出来るとはいか。そう思うようになりました。

早速、アプリや翻訳サイトで中国語を学び始めました。また、彼女に中国語で手紙を書き、文を添削してもらったり、質問をしたりすることにしました。数日たって彼女から手紙が返ってきたとき、私は驚きました。私が中国語で書いた手紙に日本語で返って来たのです。手紙の文字は美しく丁寧で、心を込めて書いてくれたのがとても伝わってきました。手紙には、「話しかけてくれてうれしかった」「日本語が上手くないのでどう話したらいいか分からなかった」と苦悩していたことが書いてありました。彼女も私と同じ気持ちだったのだと知って、中国語を学んでよかったと心から思いました。彼女と文通をしていく中で、私も日本語を教えたり、中国語を教わったり、お互いの文化を紹介したり…私と彼女の関係が、より親密になった気がしました。手紙を書くにあたって、彼女の置かれた環境、「母国語ではない

言葉で生活する苦勞」について考えました。私がもし彼女の立場だったら絶対に不安だし、正直今のよう生活していく自信がありません。彼女はそんな中でも強くたくましく生活していて、見習うべき姿勢だと感じました。

彼女と文通を始めた頃、本やネット記事の情報から「インクルーシブ教育」というものがあることを知りました。インクルーシブ教育とは、国籍や障害の有無、性別、宗教の違う様々な子どもたちが同じ環境で学び合う教育のことです。いろいろな子どもが共に学び、互いに理解し合うことで共生社会の実現を目指していて、日本でも導入されています。彼女が私に日本語で手紙を書いてくれたこと、私に分かりやすい言葉で教えてくれたこと。それによって私の中国語への関心と理解がより深まりました。そして、彼女がしてくれた配慮は、このインクルーシブ教育そのものと気づきました。

「如果我们互相理解、我们就可以和任何人成为朋友」お互いを理解し合えばどんな人とも友達になれる。私はそれを彼女から学びました。私に学びの機会をくれた彼女に、心から感謝を伝えたいです。私が中国語をきっかけに彼女と親交を深め、様々な事を学べたように、「知る」ということで初めて得られるものが世の中にはあります。「知る」、ということは何か素敵なものに出会うということです。これからも彼女と手紙を通して親交を深め合い、日本や草加のことをもっと知りたいと思っています。そして、私も多言語を学んでその国の文化を知り、彼女がしてくれたように、少しでも誰かの役に立てるような人間になりたいです。

大会の感想や今後の抱負

去年は市大会での発表、今回は県大会でも発表する機会をいただきすごく緊張しましたが、いざ発表するととても楽しかったです！友人、先生、市民会議の方々に感謝です。本当にありがとうございました！



中学生の部 優良賞

辛かった日々を乗り越えて

和光市立第二中学校 3年 高橋 李珀

僕がサッカーを始めたのは小学5年の9月。自分で言うのもなんだが、足が速く左利きというのもあってポジションは左トップだった。

初めての試合、ゴール前に詰めていた僕にボールが転がってきた。左足を合わせたボールはゴールを揺らした。初ゴール。みんなが僕に駆け寄り祝福し、母もとても喜んでくれた。あの光景は今でも鮮明に覚えている。

5年生最後の試合終了後、監督に次からキーパーをやれと言われた。正直ショックだった。キーパーの基礎練習。つまらない日々が続いた。

6年生になり、公式初戦の市内大会、無失点での優勝。僕は最優秀ゴールキーパー賞をもらった。そして市内と北足立南部トレセンの選抜に選ばれた。一番自分が驚いた。

小学校卒業間近、チームメイトがクラブチームセレクションを受けると話していて、僕もクラブチームで専門的に習いたいと母に話したら「いいよ」とあっさり言われた。

クラブチームは勝つことが重要視され、負ければキーパーの責任というプレッシャーがあったが、何とか毎日を耐えていた。

ある日、チームメイトに「ウザイ、話しかけんな」と言われた。冗談だと思っていたが、その言葉が「死ね」という言葉に変化していった。僕の心は崩れ始めた。練習時間が近づくと腹痛でトイレから出られなくなった。「やめたい」と母に話したら理由を聞かれ「辛いから」と答えた。「それは理由にならない」当たり前回答だったが真意は話せなかった。ひとり親の母に心配をかけたくなかったからだ。だが、僕の体が限界を迎えた。

練習中に激しい腹痛に襲われトイレに行った後の記憶はない。気が付いたらコーチがいた。トイレで気を失ったようだ。「限界だ。」そう思った。

次の日病院へ行った。母とお医者さんが専門用語で話していた。母はカウンセラーの資格を持っており、今考えたらそんな内容だったんだと思う。

処方された薬を飲みながら練習に参加した。「サボりか」とチームメイトに言われ、完全に心が折れた。「やめたい」「何で」「辛いから」。母と話していたら、泣いている自分に気が付いた。「いじ

められてる」やっと絞り出した一言だった。これまでの辛い日々を母に吐き出した。母と話した次の日、コーチに事実を伝えた。コーチは驚いた顔をしていた。チームメイトはすべてを認め、泣きながら謝ってきた。その日以降、嫌がらせはなくなったが、また何か言われるかもしれないという思いは消えなかった。

チームのキーパーは3人。ほかの2人が骨折し試合に出られるのは僕だけだった。大切な試合が続いていたが善戦虚しく負け試合が続いた。「あのシュートは止められるだろう」そう言われることが多くなった。悪夢が蘇った。また腹痛が始まった。

僕の担任の先生はサッカー部の顧問をしている。先生もクラブチーム出身で、僕の辛さを理解してくれると思った。部活に行きたいと話してみると「クラブチームで頑張ってもらいたいけど、正直大歓迎だよ」と言ってくれた。母にチームをやめ部活に行きたいと話すと、「自分でコーチに話しなさい」と言われた。最初に辞めたいとコーチに伝えてから2か月、部活へ移ることができた。

「待っていたよ」とみんなが歓迎してくれた。一番驚いたのは母の一言だった。「試合会場が近くて助かる」。もしかしたら僕に「気にするな」と言っていたのかもしれない。「お母さんごめんね。ありがとう」そう泣かずに伝えるのが精一杯だった。母は笑っていた。

あの辛かった日々を乗り越えて、僕は毎日を楽ししく過ごしている。人は傷つくと立ち直るのは難しい。しかし、僕には支えてくれるたくさんの仲間がいる。幸せだ。これから僕たちが最高学年としての試合が始まる。大好きな仲間と信頼する指導者のもと、母の声援を背中に受け、思いきりサッカーを楽しみたい。

大会の感想や今後の抱負

今回この作文を書くことにより、当時の自分と向き合うことが出来ました。改めてあの時のことを振り返るとたくさんの方に支えられ、大きく成長できた良い時間だったと思います。感謝いたします。



素直に言えない感謝の気持ち

三郷市立北中学校 3年 武田 結葵

「常に人に感謝の気持ちを持って欲しい。」

これは小さい頃から母に言われてきた言葉だ。『ありがとう』の言葉なんて当たり前に口にしてきたのに、改めて言われると、できているのか不安になる。でもその不安な気持ちは、今の私にはない。

一昨年の大晦日、目を開けると知らない人がたくさん家にいた。割れた皿が散乱し、ダイニングテーブルの椅子は倒れ、目の前には大泣きの妹と、深刻な表情で話をしている母の姿があった。知らない人から名前や誕生日、今日が何日なのか聞かれたが、思い出せなくて答えられなかった。何が起きているのか自分でも分からなかったが、目の前の知らない人が救急隊の人で、自分は食事の時にけいれん発作を起こして倒れたのだと後で知ることになった。小さい頃から熱性けいれんを何度か起こし、発作が起きないように服薬してきた。発作が見られなくなってきて薬を少なくしてきていたことと、成長による体格の変化などが重なって発作につながってしまったようだった。その後も何度か発作が起きるようになった。その間の記憶は飛んでしまっていて私には分からない。倒れてけがをしないように支えてもらったり、苦しくないように横にしてもらったりと、いつも家族に助けられてきたことだけは分かる。そのおかげで私は何事もなかったかのように、日常に戻ることができている。しかし、発作の後には決まって母は、「感謝の気持ちを」というので、

「分かってるって言ってるじゃん。」

「何が起きたか自分では分からないんだから、しょうがないじゃん。」

と、母に言い返してしまったことがある。自分だって好きに倒れているわけじゃない。助けてもらったとしても、それが記憶になかったら感謝したくてもできないじゃないか。そんな思いが素直に感謝することを邪魔したのだった。

さらにその後、薬の調整をしている間に、何度か学校でも発作が起きるようになった。その度に先生や友達に助けられた。発作のことを家族以外の人に知られることが、本当は怖かった。急に倒れたりけいれんが起きると聞けば驚くだろうし、

引かれてしまうのではないかという不安が大きかったのだ。突然起きること、自分に記憶がないことで、どれほどの迷惑がかかるか想像するのも怖かった。でも顔色や普段と違う様子があると「大丈夫？」と聞いてくれる友達、体調をいつも気にかけてくれる先生、少しの変化にこれだけ気付いてもらえることへのありがたさを強く感じる。ただ、聞かれて『大丈夫』とは答えても『ありがとう』の言葉は言えていない気がする。『ありがとう』を言葉にすることは簡単ようで簡単ではないのだと気付かされた。自分では言っているつもりでも、言われなくても分かるだろうと済ませてしまっていた。この時初めて母に言われていたことが分かった気がする。気持ちは「見えないもの」で、常に感謝の気持ちを持っているかは、言葉にしないと周りからは分からない。だから口に出して伝えることが大事なんだと、母は言いたかったのではないだろうか。

目に見えないものに気付くことは本当に難しい。それは感謝の気持ちだけではない。いろいろな感情は心の中に隠されていることがほとんどだ。言葉だけで表せるものでもないけれど、できるだけ言葉にして伝えていきたい。『ありがとう』この5文字の重さを私は他の人よりずっと多く知っている。発作が起きた時の記憶が飛んでいても、けがも何事もなく意識が戻ったことが、その時周りにいてくれた人への感謝につながる。その感謝をしっかりと伝えることが、今の私にできる大切な使命なのだと実感している。もちろん助けてもらうばかりではなく、私も人の助けになることは進んでやっていきたいと思う。目には見えないものと闘う辛さを知っているからこそ、誰よりも深く感謝の気持ちを持って生きていく。

大会の感想や今後の抱負

大会を通して、自分の体のことを周りに知られるのは怖かった。ただ、自分がたくさんの人達に支えられて生きているから、その「ありがとう」の思いを伝えたい。今後も感謝を大切にしていきたい。



無関心と感謝のはざまで

西武学園文理高等学校 2年 大淵 佳澄

「また家族でご飯を食べたい。また友達と一緒に学校に通いたい。私の願いはそれだけです。」

これは、18歳の少女ソフィアさんの言葉です。私が中学2年生の2月に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まりました。1年後の冬、ウクライナから日本へ避難してきたソフィアさんと出会いました。それまではニュースで戦場の映像を見たり、犠牲者の数を聞いたりしても、どこか自分とは違う世界のこのように感じていました。ですから、彼女の講演会に出席する前は、まるで他人事のような気分でした。

彼女は故郷の話をしてくれました。ニュースで伝えられるのは、ほんの一部にすぎないと。目に涙を浮かべながら、途中で言葉に詰まり、震える声でその悲惨さを訴えていました。彼女は、慣れ親しんだ故郷を、たった一人で離れなければならなかった。戦争とは、人々が安心して過ごせる場所を簡単に破壊してしまうものでした。戦争中に親と離ればなれになった子どもは、地獄のような光景を目の当たりにしています。その親も地獄を駆け回り、自分の子どもがどこか傷ついていないかと、胸が張り裂けそうな思いで探し続けているのです。家族と生活していた家、通っていた学校、友達と遊んだ公園、大切な人――私は、その日、戦争がもたらす犠牲の重さを初めて知りました。

現代では、暴力的な内容のゲームが若者の間で流行しています。ゲーム内では、当たり前のように殺人が行われており、それに興奮を覚える人さえ増加しています。これは、人々の戦争に対する感覚が麻痺してしまっている証拠です。しかも、この仮想世界として作られたゲームのように、現実世界でも人々が武器を持ち、戦っているのです。

また「ウクライナに支援を」、「ロシアが悪だ」という単純な構図が広がっていますが、私は一概にはそうとは言えないと感じています。ロシア軍の兵士にも命を落とす危険があるし、家族や友人という大切な人々と離ればなれになっているのです。ソフィアさんの言葉にも「ロシアが嫌い」というものは一言もありませんでした。憎むべきは戦争そのもののなのです。

もし戦争が終わったとしても、さらに悲劇は続きます。生きて帰ってこられた兵士たちは、安全な場所に戻っても心を病み、自ら命を絶ってしまうことがあります。それに、帰らぬ人を待ち続けている家族や友人の心の傷が癒えることは、一生ないでしょう。

なぜ、このように悲惨な戦争が起こってしまうのでしょうか。

一つは人々の「無関心」です。実は、人々が平和への責任を担っているのに、そのことに気づいていないのです。例えば、日本の選挙の投票率は世界的に見ても低く、未来を他人任せにしている現状があります。これは人々が政治に関心を持っていない、政治に責任を担っていることに気づいていない証拠ではないのでしょうか。これはとても危険な状況です。みんなが政治に責任を負うようにならないと戦争はなくなりません。最大の敵は人々の無関心です。

もう一つは、「感謝の気持ちを忘れてしまっていること」です。

ソフィアさんも語っていました。当たり前前（あたりまえ）のことを当たり前前にできること、そんな平凡なことが平和なのです。そのことに深く感謝しなければなりません。でも、人々は日常を繰り返しているうちに、だんだん、その感謝の気持ちを忘れてしまうのです。その結果、日常を大切だと思わなくなってしまうのです。人々が大切にしていないものは、いつかきっと失われてしまいます。

戦争を起こさないのと同時に平和を守ること大切です。平和を維持するためには、「心のせめぎあい」が必要です。無関心と戦うこと、感謝の心を守ること。この二つを続けることです。戦争で苦しむのも人間なら、戦争を起こすのも人間です。私たちの心のありようが、未来を左右するのです。

今、ウクライナとロシアの戦争では、ロシア軍が迫る中で、ウクライナの市民を助けようと自分の車で支援物資を届けたり、家を失った市民が長期的に滞在できる宿泊施設の準備を進めたりしている人々がいます。真剣に取り組んでいるのです。それでは、今、戦争で苦しんでいる人々に対して、遠く離れた日本にいる私たちにはできることは何でしょうか。

私たちにはできることはまず「知ること」です。知ることでも小さな支援の一つです。その上で自分にできることを考え、行動するのです。たとえどんな小さなことでも。もう一つは、みんなが政治に参画することです。まずその初めの一歩として選挙へ行くことです。戦争のない世の中にするためには、みんなが政治に関心を持ち参加することが大切です。

来年、私にも選挙権が与えられます。平和な世界を築く第一歩として、必ず投票に行きたい。友達も誘って、共に未来について考えていきたい。それが、私にできる「平和を守るための第一歩」です。

今の平和は先人たちの犠牲の上で成り立っています。先の大戦では、日本でも多くの犠牲者が出ました。私たちが未来に希望を描けるのは、先人たちがこの平和をつないでくれたから。それをないがしろにするわけにはいきません。平和は、誰かが与えてくれるものではありません。一人ひとりが自覚し、行動し、守っていくものだとは私は信じています。

今を生きる私たちは、だからこそ、自分の殻を破り、外の世界に目を向けることが大切です。もっと他人を理解しようとしなければなりません。日々を当たり前とせず、感謝すること。その気持ちが、私たち一人ひとりに平和をつなぐ力をくれるのではないのでしょうか。今こそ心の戦いを始めましょう。ひとりひとりが自覚して責任をもって平和を未来に残しましょう。

大会の感想や今後の抱負

本番では緊張しましたが、自分の言葉を多くの方に聞いていただけたことが何よりの喜びです。これからも自分の考えをしっかりと持ち、行動して成長を続けていきたいと思えます。



高校生・一般の部 優秀賞

「やさしい日本語」を広めたい

筑波大学附属坂戸高等学校 3年 小柳 紗弥加

あなたは「やさしい日本語」を知っていますか？「やさしい日本語」とは、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮した分かりやすい日本語のことです。最近、日本に住む外国人が多くなっています。出入国在留管理庁によると、現在日本には358万人以上の在住外国人がいて、日本の人口の約2%にのぼるそうです。年々増加していて、身近に外国人がいることが多くなってきました。私は外国人に対して無意識的な偏見を抱いてしまっています。例えば「文化が違うから話が合わない」とか「英語ができないから深い話はできない」とか、文化や言語が違う事を理由に外国人と話すことを避けている気がします。私が通う高校では外国人留学生との交流をするイベントがあったり、英語の授業でALTの先生と会話のテストがあったり、外国語に触れる機会が多いです。その中で、実際に外国の方と交流をして「意外と話せる」とか、「もっと仲良くなりたい」と思うようになりました。しかし言語の壁は高く、簡単に越えることができるものではありません。実際、共通言語がなければ話ができないし、相手のことを理解することはできないと思います。そこで私は日本社会に「やさしい日本語」を取り入れていきたいと考えます。もし上手く取り入れることができれば、外国人との壁が少し低くなると思います。

私が「やさしい日本語」に出会ったのは、高校1年生のときの授業でした。ボランティアで坂戸市民の生活の支援をしている方々が授業をしてくれました。この授業の中で、全く読めない外国語で書かれた問診票を翻訳せずに書いてみたり、カタカナで書かれたお題をカタカナ禁止で人に伝えるゲームをしたりしました。問診票を書く時の言語が分からないことによる困りを体験し、カタカナを言い換えるというような物事の言い換えから、「やさしい日本語」の大切さを学びました。これは私の中で画期的な発見であり、「やさしい日本語」をととても魅力的に感じました。それと共に外国にいるなら誰もが通るであろう言語の壁による問題を、自分事として初めて考えました。自分が、この困難を考えたことが無かったことに恥ずかしさを覚えました。在住外国人が日本で増えていることや、文化の違いから対立してしまうことがあることなどの問題があるのは知っていたつもりでしたが、このような困難が日常にごろごろと転がっているということに、初めて気が付きました。また、自分が同じ状況になってみないと問題意識は持てないし、解決なんかできないということもわかりました。

このようなことから、日本にいる外国人とのコミュニケーションを少し取りやすくする「やさしい日本語」を広めることはできないかと考えるようになりました。ここから、2年生の時に行ったグループでの探究活動で「やさしい日本語」を広める活動をしました。言語が分からないことによるストレスと、

少し分かりやすくした「やさしい日本語」の大切さが分かるゲームを考えました。このゲームを体験してもらうためにイベントに出展したり、実際にやさしい日本語を使って日本語教室でのボランティアに参加したりするなどの活動を行いました。活動を通して、「やさしい日本語」はあまり知られていないけれど、「やさしい日本語を大切なことだね」と言ってくれる人が多くいました。少しですが、広めることができましたと思います。

会話は翻訳機を使ってできますが、少し違うニュアンスで翻訳されてしまうことや、自分の言葉で話している感じがしないことがあり、話したいと感じても会話の際に躊躇してしまいます。考えを共有することや、何かについて議論することが難しいと感じ、外国人との関わり方に暗いイメージを持っていました。しかし、やさしい日本語を使ってコミュニケーションが取れる人がいることを知り、これを共通言語として使えそうだと思いました。

そもそも、やさしい日本語は、阪神・淡路大震災がきっかけで広まりました。避難情報が難しい日本語だらけで、外国人の逃げ遅れによる被災者が多く、物理的な被害だけでなく、情報の面でも被害を受けました。「やさしい日本語」は、日本人の間でも使えます。例えば、災害時の情報や守らなければいけないルールなど、どんな人にも同じように伝わるようにしたいときに使えると考えます。

では、なぜこんなに便利なのに広がらないのでしょうか。それは、災害時などに使われている言語を全員が理解できていないという現状を知る人が少なく、問題意識がされていないことが原因であると考えます。私も、当事者の目線に立って初めて問題意識を持ちました。そのため私は「やさしい日本語」のニーズや、日本にいる外国人がどんなことに困っているのかという現状を広めていけたらいいと思います。3年生で行う卒業研究ではこのことをテーマにして研究を進め、大学では日本語やコミュニケーション、共生について学びたいと考えています。

このように、「やさしい日本語」の活用など自分に少しでもできることをしていきたいです。そうして在住外国人との間に壁を感じずに、また外国人だけでなくたくさんの人との間に壁をつくらず暮らしたいです。このような共生社会を私は望みます。

大会の感想や今後の抱負

自分の主張ができる機会をいただき、ありがとうございました。大会では、伝え方の重要性を学びました。今後はより自分の考えや知識を深め、大会で学んだことを活かして行動していきたいです。



命は軽くない

埼玉栄高等学校 2年 黄 京京

先月、私はとあるショッピングモールのペットショップに行った。そのショッピングモールは約半年ぶりで動物の種類もきっと変わっているんだろうなとワクワクした気持ちで見に行った。しかし半年前に聞こえていた犬の鳴き声や見に来るお客さん、明るい雰囲気は全て無くなっていた。そう、変わっていたのは動物の数だった。

目の前に写る透明なガラス、蹲って寝ている犬の前に書かれた「今だけ特別価格」「新しい家族が見つかりました」と可愛らしい文字で書かれた貼り紙。新しい家族が見つかった事が知らされていない動物はどこへ行ったのだろうか。私はすぐに殺処分というワードが頭を過った。殺して処分する、なんと恐ろしい言葉なのだろうか。そこで私はペットショップで売れ残った動物たちはどこへ行くのか調べた。売れ残りの犬にはいくつかの対策がとられていた。一つ目は譲渡会や里親募集にだされること。動物保護団体と連携し新しい飼い主を探し出される。二つ目はブリーダーに返還されること。多くのペットショップはブリーダーと契約しており、ペットの仕入れを行っている。三つ目は保健所に持ち込まれ殺処分の対象になること。やはり殺処分はあったのだ。環境省のデータによると2022年4月1日から2023年3月31日までの一年間で引き取り数約2万2千頭に対して約2,400頭が殺処分されており、一日に換算すると毎日6.6頭が殺処分されている。

ペットたちは自分が誤った境遇に入っただけで運命が決まってしまうのだろうか。人間の利害に基づいて動物を殺す、飼うのが面倒になったから保健所に預ける、人間に限らずどんな生き物を殺しても犯罪だと思う。そう思っているにもかかわらず殺処分される動物を全て飼うわけにはいかない。しかし私は楽に死ねるならいいのではないかと考えてしまった。殺処分のやり方について調べたところ、ドリームボックスと呼ばれるガス室に追い

込まれ、炭酸ガスによって窒息死すると分かる。安楽死と呼ばれているが安らかに息を引き取ることなどできない。ドリームボックスには苦しんだ犬猫たちの爪痕が数多く残っておりそれがどれほどの苦痛なのか私たちには分からない。ドリームボックスという名称にも、少し違和感を覚えた。いい夢を見ながら安楽死をするにも行っていることが程遠い。表面上では最期だけでもいい夢が見られるように、安らかに眠れますようにと願いを込めたのかもしれないが私は人間の罪悪感を無くすためだと感じた。

全てを調べ切ったところで私は犬猫がどれだけ苦しんで殺処分されているか知ることができた。私に残った考えはただ一つ、人間の好き勝手で奪えるほど命は軽くない。犬猫が殺処分された数がデータになってはいけなはずなのに毎年データになって発表されている、そんなことはしてはいけなはずだ。私たち人間に足りないのは命の重みを知ることだと思う。この作文を読んでいる人も殺処分の苦しみを考えたことがあるだろうか。今になってもう一度考え他の仲間と意見を共有してほしい。私たちにできる具体的な対策を調べなくても疑問に持った人たちが意見を伝え合い、そして拡散する、今私たちが殺処分で亡くなった動物たちにしてあげられる最善の手段だと思う。

大会の感想や今後の抱負

昔からずっと思っていた社会問題を主張することができて良い経験になりました。今回の主張を踏まえて、他の人とも社会問題についての意見を交わしていきたいです。



間違い探し

埼玉県立浦和商业高等学校 1年 莊 世莉奈

「この世には、目にみえない魔法の輪がある。私は外側の人間、でもそんなのはどうでもいいの。」これは私の大好きな本である、ジョン・G・ロビンソン作の「思い出のマーニー」の言葉です。

私は正直、小さな頃から周りの子供とは違う性格や価値観を持っていました。一人遊びが好きで、生き物の図鑑を見たり、絵を描いたりを幼稚園では繰り返して、晴れた日には園内の校庭で何かを観察していました。周りの友達はドレスやおままごとが好きだったけれど、私は全部嫌いでした。家族も女の子らしくない性格だった私を、少し心配していたかと思います。小学生になったときは自分と少人数の友達だけの秘密基地を見つけて、休み時間にはその場所でひっそり遊んでいました。一人遊びに慣れてしまって、大人数と遊ぶことは疲れるようになったからです。この頃は先生からも心配されるようになりました。

しかし、私はずっと考えていることがあります。「普通の人なんているのか?」ということです。今まで書いた私の性格や価値観は全て私からしたら普通のことです。それなのに心配されると「あなたの考えは間違っている。」と言われてるように感じてしまいます。きっと、心配してくれる人がいるということはずごく恵まれていることです。そう分かっているにもかかわらず裏ではお節介で面倒くさいと思ってしまい、私はそんな自分が嫌いです。

始めに戻ると、私が好きな「思い出のマーニー」のあの言葉は物語の始めに主人公がつぶやく言葉です。小さい頃にその映画を見たときは、主人公のその言葉の意味があまり分からなかったけれど、成長してから見るといつの間にか共感できるようになっていました。その瞬間、子供のときは周りのことを気にせず、自分の好きや性格をつらぬいていたのに対して、成長と共に意味が分かってしまうくらい、この主人公のように自分を隠すようになっていくことに気づきました。それは悲しいことではありませんでした。けれど、大事なものをどこかに失くしたような感覚が少しありました。自分を隠すようになったのは、成長と共に変化していった周りの人たちの反応でしょう。幼い子供が一人遊びをしていれば、手のかからない良い子だと言われ、静かにしていればそれも一つの個性として認められるものです。ですが、その子供が大きくなれば、交友関係を広めるために友達をつくって色々な人たちと遊ぶべきだと言われるようになります。そうしないと成長しない、社会で求められるような良い大人になれないといった考えでしょう。そういった面でコミュニケーション能力はきっと必要になるときが訪れることは理解していました。それでも私は当時を優先して、自分が一緒にいて楽な人とだけ接して、一人であるときには、自分の居場所を邪魔されないように、誰かが来たらつまらなそう顔をして誰も深入りして来ないようにしていました。

けれど、中学生になったとき、そんな自分を捨てることになってしまいました。中学校では吹奏楽部に入った私は、よりよい楽団にするため、部内での友達と仲を深めるようになりました。そこからだんだんと、集団と一致団結することが苦痛じゃなくなり、少し楽しめるようになっていきました。一人遊びだけでなく、以前よりも友達と遊ぶ機会も増え、自分が思っていたよりも良い生活を送っていました。

しかしそんな時間も失っていきました。仲が良かった部活ではお互いに裏で陰口を言っていたり、意見や考え方の違いから壁ができていたり、嘘のうわさを広めるようなこともありました。せっかく築き上げた友情は崩れていき、部活を辞めていく生徒も増えてしまうことに。私は顧問の先生から「お前が一番下手くそなんだ。」と言われ、先輩からは「下手くそすぎて聞きたくもない。」とまで言われてしまうようになりました。なぜこうなってしまったのか、慣れない人間関係を一気に作り上げようとした自分に落胆しました。また昔のように何も気にせず、本当の自分で居た方が楽なんだと考えた私は、部活が終わってからはみんなを待たないで一人で帰り、一緒にいるときも自分から話そうとはしませんでした。その頃には小学生からの親友も引っ越してしまい、私のことを分かるのは自分だけだと思うようにし、そんな私を見ている家族はもっと暗くなってしまったことに対して悲しんでいました。そしていつものように一人で帰るとき、部活の友達が私の名前を呼びました。それでも私は聞こえていないふりをして進んで行きます。ずっと進んだとき、みんなが私を走って追いかけて来ていました。追いついたみんなはきっと私に怒るに違いないと思っていた私は驚きました。みんなはずっと一人で帰っていた私を心配してついて来ていたのです。そうして私は気づきました。本当の私を知っているのは私だけでも、その一部に気づいてくれる人はいるんだと。

高校生になった私は本当の自分を出しながらも、前よりも笑顔を見せるように頑張っています。私は自分独特の個性を殺すことを勧めているわけではありません。ただ、ときには強がらずにプライドを減らすことも大切なのだと思っています。そしてそのような子の周りにいる人たちは、ただ静かに見守ってほしいと私は考えています。

大会の感想や今後の抱負

自分の考えを主張する機会をいただけたことを嬉しく思います。他の方の主張を聞き、障害や未来、国際的な問題についてよく考えさせられました。これらの主張が世界へ届くことを願っています。



世界の人々とどう向き合うか

埼玉県立和光国際高等学校 2年 中井 優杏

現代、人種差別は良くないという意識が一般化されてきているのは大変良いことだと思う。しかし、完全に差別がなくなったといえは嘘になる。例えば、アメリカの人種差別は歴史的背景が根深い問題であり、以前に比べて多少の緩和はあるものの、未だ苦しんでいる人が存在する。この表面化した人種差別に対して否定的な意見を持つ日本人は多いだろう。日本人に限らず、比較的国内の差別が少ない国に住んでいる人々は何となく「差別は酷い、悪いものだ」と考えていると思う。そのように考えている人たちは自分たちが差別する、される、という状況にいない。要するに、自分たちと差別は遠いものだと思っているのではないだろうか。あるいは、自分の心のどこかに一部の人々を蔑んだり、近づきたくないという気持ちを抱えているが、それを表に出さなければ問題ないと考えている人もいると思う。果たしてその心は、差別と全く無関係であるといえるのだろうか。知らぬ間に、差別的な発言や行動をとってしまっていないだろうか。ここで、私はこんな疑問が浮かんだ。「なぜ差別の心がうまれるのだろう」この問題に対し、私にとって最も身近な日韓関係を例に考えてみた。

私の母は在日韓国人である。日本で生まれてから、今まで日本で生活をしてきた。そんな母とはたまに、日韓関係について話すが、そのとき母が言うのは「過去にされたことは消えない」ということだ。戦時中、長い間韓国が、日本の植民地下にあったのは周知の事実だろう。その影響や竹島の領土問題などにより、政治的な面で日韓関係は良好であるとは言い難い。このようなことにより、韓国人を良く思わない人がいるのは仕方がないことかもしれない。実際、日本人を嫌う韓国人だっていることを、私は知っている。つまりは、互いに良く思っていないのだ。しかし、その両方の血を受け継ぐ身としては、その互いに対する恨みだとか、人間性が気に入らないだとかで差別するのはどうも納得いかないのだ。

ある日、私は「祖国へ帰れ」は差別的で違法であるという記事を見た。どうやら、在日韓国人に向けて「祖国へ帰れ」との発言が差別的だと判決され賠償を命じられたらしい。この記事を読み、私は母に何の気もなく、「嫌だなんて思ったら一回帰ってもいいんじゃない？」と言ったことを思い出した。その時母は「それが一番傷つくんだよ、

帰るもなにも、私の故郷はここで、思い出もここにあるんだから」と言っていた。私はそのとき初めて、母の生きづらさが分かった気がした。差別を受けているのに安心して帰れる場所がある訳でもないのだと。聞いた話によれば、在日韓国人が韓国に行っても、日本人としての扱いを受けるらしい。今はK-POPが流行していたり、韓国のファッションを素敵だと感じる若者が増えたため、私は母が韓国人だということに何も思っていないが、母は、自身が韓国人だと明かすことに勇気がいるのだと思う。世代を超えるごとに差別の意識も薄れつつあるのかもしれない。だがしかし、その中でも残る偏見や風潮は、なかなか消えることはないだろう。韓国人は気性が荒い。日本人は薄情者だ。そんな、いわゆる主語の大きい決めつけが差別の根となるのだ。本当は皆、同じ人間で、心を通わせることができるのに。

私のように、中立な立場からでしか見えてこないこともあるのだと思う。私はこの問題に対して、人一倍重く受けとめている。だからこそ、この差別を生んでしまった背景を知る必要があると思うのだ。また、偏見や先入観を捨てることも、重要になってくると思う。気性が荒いというのも言い換えれば情熱的で人情深い。薄情者というのも同様に、合理的で賢いといえるだろう。

初めから、どこの国だから怖そう、汚そうなどと否定的な印象をもたずに、まずは話してみることが、この先の国際社会を生きていく者として心がけるべきことだと思う。怖そうに見えた国の人も、温かくてよく笑う人だとしたら、その国へのマイナスな印象も改善されていくのではないだろうか。そして、歴史をしっかりと学び、日本だけの視点に限らず様々な国からの視点で大戦などを知っていくことが、真実に一番近くたどり着けるのではないかと思う。物事のどこを見て、自分でどのように判断するか。その価値観や能力を磨いていきたい。

大会の感想や今後の抱負

この作文は私の世界平和への願いを込めて書きました。捉え方は人それぞれだと思いますが、少しでも皆様の心に響いていることを願っています。

特別賞の紹介



「Humming Bird 未来基金」特別賞
三郷市立新和小学校 5年
西川 和希さん



「WATABOKU (わたぼく)」特別賞
春日部市立武里小学校 6年
伊藤 愛美さん



「埼玉キワニスクラブ」特別賞
三郷市立瑞穂中学校 3年
竹内 晴人さん



「輝け・明るく・裕 (ゆたか) に」特別賞
和光市立第二中学校 3年
高橋 李珀さん

「お米ってこんなに高くなったの。」
「あまり稼げないから、農家にはならなくていいんだよ。」
そんな家族との身近な会話をきっかけに、西川さんは自分で考えを深めていきます。「これからどうなるのか」「このままでいいのか」と自分で問いを立てる事に豊かな感受性を感じました。
さらに、農家が必要であることや農業の達成感について、ただの意見ではなく自分の体験をもとに考えを広げている点がとても素晴らしいです。最後に「新しい時代の農業の可能性」へと未来に目を向けているのも印象的です。問題意識を持つだけでなく、希望を持って前向きに考えをまとめられているのは、大人から見ても頼もしい姿だと思いました。

伊藤愛美さんの主張は、人生はプラス面、マイナス面双方の経験があって成長できるものという奥深い発表でした。中でも東日本大震災後に来日されたブータン王国のワンチュク国王陛下が被災された子供たちに語られた「人格の中に必ず存在する『心の龍』は良い経験も悪い経験も食して大きく成長する」という励ましの言葉から、伊藤さんご自身もプラス経験もマイナス経験も全て受け入れ心を大きく成長させていきたいと結ばれたこと、とても共感いたしました。

竹内さんから問いかけられた「書字障害」「ディオレクシア」という言葉を「知っている」と答えられた人はどの位いるでしょうか。脳の特性に合わせ、言語聴覚士からの教えにより、代替方法の習得へ努力を重ね、学校での合理的配慮や「同じ症状で苦しむ子どもたちの支援や共感を広げ、知ってもらうため」公表に踏み切った勇気と決意に感銘いたしました。次世代を担う世界の子どものための幸せのために活動している 国際奉仕団体 埼玉キワニスクラブから特別賞を贈りました。

「辛かった日々を乗り越えて」チームメイトによる心無い言葉によって心身が傷ついてる自分自身が絞り出した一言の勇気、寄り添い支える家族がいること。自身の境遇により辛い時を乗り越えるために後押ししてくれる一言によって踏み出す一歩に熱い想いを感じました。「大好きな仲間」「信頼する指導者」「母の声援を背中に受け」自分が支えられていることへの感謝の気持ちが伝わりました。今度は支え手となることに期待します。

夢や未来の姿に向かい、辛さを抱きつつ優しさあふれる作品が希望のキーワード「輝け・明るく・裕 (ゆたか)」となるように特別賞を贈りました。



「未来をプラスに。埼玉りそな銀行」特別賞
加須市立大利根東小学校 6年
安藤 颯佑さん



「ポジティブネット YMCA」特別賞
埼玉県立和光国際高等学校 2年
中井 優杏さん



「テレ玉」特別賞
筑波大学附属坂戸高等学校 3年
小柳 紗弥加さん



「埼玉新聞社」特別賞
ふじみ野市立東原小学校 6年
増田 紅さん

「安心・安全登校コンクール」は、まさに輝かしい明るい未来を築く為の第一歩である、「学校から地域へ」を体現した取組と言えるのではないのでしょうか。未来の平和を願う安藤さんだからこそ、小さな意見を大切に、みんなが安心して発言できるようにしたいという想いを強く感じました。そんな安藤さんにこそ、「未来をプラスに。」賞が相応しいと思います。

私たちの未来がよりよいものとなるように、思いやりと挑戦の気持ちをこれからも大切になさってください。

偏見や差別に対して、話し合うことや相手の話をよく聞くことで解決しようとする姿勢に、深い感銘を受けました。

以前の大会で「アンコンシャス・バイアス」という発表を聞きましたが、心の奥にある無意識の偏見や固定観念に気づく方法は、まさに「耳を傾けること」で与えられるのだと改めて感じました。この姿勢は、「互いを認め合い、高めあうポジティブネットのある豊かな社会」「みつかる・つながる・よくなっていく」というYMCAのビジョンとスローガンに合致したため選出いたしました。

日本で暮らす外国人にとって、生活や災害時の情報の理解などに役立つ「やさしい日本語」。しかし、あまり知られていないのが現状です。

小柳さんが、外国人が直面する困りごとを授業で体験し、そこで感じた問題意識から、自らゲームを作るなどして「やさしい日本語」を広める活動に取り組まれたことは、とても意義深いと思います。様々な模索をされる先には、外国人の方との温かいコミュニケーションが広がっていくイメージが浮かんできます。

これからも、共生社会について自ら考え、行動していかれることを期待し、感謝も込めて、「テレ玉」特別賞を贈ります。

増田さんの第三の居場所「風の里」は、増田さんにとって学校生活だけでは得られないさまざまな体感ができる、なくてはならない大切な場所であることが伝わってきました。幅広い世代と交流の中で、自分という存在をしっかりと見つめていると思いました。子どもだけでなく、大人も会社や家庭以外に第三の居場所を見つけ、自分を見つめ直すことが大事だと感じました。ありがとうございました。

講 評

埼玉新聞社執行役員編集局長 砂生 敏一氏



15人の発表者の皆さん、本日はお疲れ様でした。それぞれの力強い主張の余韻が残っておりますが、まずは各賞の受賞、誠におめでとうございます。また、会場にお越しになって聞いていただいた保護者、関係者の皆様、本日はありがとうございました。

今回は、3部門に3万3287点の応募があったと聞きました。本日発表された皆さんは、その中から選ばれた15人です。皆さんの主張は、「言いたいこと」「訴えたいこと」「知って欲しいこと」が明確ではっきりしていました。そして、けれん味がありませんでした。皆さんは自分自身の内面をよく見つめながら、非常に外に対しても関心、興味を持っていると感じました。「自己という存在」「他者という存在」を問いつけながら、学校生活や日常生活の中で気づいたことや疑問、違和感を感じたことから広く社会的課題にアプローチし、日本という国そのもののあり方、国や言語の異なる人々とどのように共存していくのかなど、それぞれの問題提起に対し、独自の意見を述べていました。

審査は発表内容と表現力・発表態度の2点の合計得点で各賞を決めさせていただきました。発表者の皆さんの一生懸命伝えようという姿勢が伝わってきて、どれも甲乙つけがたい内容でした。

小学生の部は、小学生とは思えないほど自分自身を深く考察されていると感じました。特に、将来の自分の姿をイメージしながら、実現に向けて一日一日「今」を大切に何事にも精一杯向き合い取り組もう、行動に移そう、とする姿勢が共通していたのではないのでしょうか。身近な家族や周囲の人から、様々なことを学び感じながら、一步一步進んでいってください。

中学生の部は、自身の病気や困難な障害、あまり語りたくはないはずの嫌がらせなどに直面した経験を通して、「必ず支えてくれる人がいる」と勇気づける、メッセージ性のある主張が多かったと思います。また、真の共生社会を目指す上で、当たり前のことかもしれませんが、まずは互いの文化や言葉を知ることが、その一歩であることを実感しました。また、書字障害という障害については、社会に広く知られて欲しいと思いました。

今年は戦後80年ですが、海外ではロシアのウクライナ侵攻が3年に及び、中東では情勢がまだ不安定です。高校生・一般の部では、平和の尊さを訴え、平和を紡いでいこうという戦後80年にふさわしい主張がありました。動物の殺処分ゼロを強く訴えたり、年々日本への移住が増加する外国人とどのように向き合うのか、今日的課題に対し具体的な提言をされていました。グローバル化が進む国際社会の中で、それぞれのアイデンティティーを確立し、自分らしく生きていくことが大切であるとの思いも強くしました。

結びに、本日の大会開催に向けて御準備いただいた主催者の方々に改めて感謝申し上げます。また、お暑期中、会場までお越しいただき、主張を聞いていただいた保護者、学校関係者の皆様、日々の青少年の健全育成に尽力されている方々、御協力いただいた企業関係者の皆様に感謝の意を表します。そして今回力強い主張をされた児童生徒の皆様をはじめ、次代を担う若者たちが明るい未来を切り開いていくことを祈念し、講評とさせていただきます。

令和7年度少年の主張埼玉県大会の概要

1 主催

埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議・
独立行政法人国立青少年教育振興機構

2 協賛

Humming Bird未来基金・埼玉キワニスクラブ・羽石電気工業株式会社・
森乳業株式会社・株式会社埼玉りそな銀行・公益財団法人埼玉YMCA・
株式会社テレビ埼玉・株式会社埼玉新聞社

3 後援（順不同）

埼玉県市長会・埼玉県町村会・埼玉県市町村教育委員会連合会・
埼玉県公立小学校校長会・埼玉県中学校長会・
（一社）埼玉県私学協会・埼玉県高等学校長協会・
埼玉県特別支援学校長会・埼玉県PTA連合会・
埼玉県高等学校PTA連合会・埼玉県特別支援学校PTA連合会・
埼玉県私立小学校中学校高等学校保護者会連合会・読売新聞さいたま支局・
NHKさいたま放送局・FM NACK5

4 応募作文数

小学生の部	15,739点
中学生の部	15,200点
高校生・一般の部	2,348点
計	33,287点

5 大会の概要

（日時）令和7年8月31日（日） 午後1時00分～4時45分

（場所）さいたま共済会館 大ホール

（進行）

- ・開会
- ・挨拶（青少年育成埼玉県民会議副会長 小松 弥生）
- ・主張発表
- ・ミニコンサート
- ・審査結果発表
- ・講評（株式会社埼玉新聞社執行役員編集局長 砂生 敏一氏）
- ・表彰式
- ・閉会

6 審査員（敬称略、順不同）

（１）第一次審査員

小学校の部・中学生の部（令和７年７月２日（水）審査実施）

新井 栄司 埼玉県退職校長会
荻田 哲男 埼玉県退職校長会
小島 健司 埼玉県退職校長会
眞嶋 廣久 埼玉県退職校長会

高校生・一般の部（令和７年７月１日（火）審査実施）

伊古田 陽子 埼玉県高等学校等退職校長会
小林 一郎 埼玉県高等学校等退職校長会

（２）第二次審査員

杉原 賢一 埼玉県公立小学校校長会 研修推進部長
福田 和己 埼玉県中学校長会 副会長
臼倉 克典 埼玉県高等学校長協会 会長
川田 清隆 埼玉県高等学校ＰＴＡ連合会 事務局長
砂生 敏一 株式会社埼玉新聞社 執行役員編集局長
小松 弥生 青少年育成埼玉県民会議 副会長
柿沼 トミ子 青少年育成埼玉県民会議 副会長
芦澤 吉一 青少年育成埼玉県民会議 副会長
田中 邦典 埼玉県教育局県立学校部長
島村 克己 埼玉県県民生活部県民共生局長

令和７年度 賛助会員の皆様

青少年育成埼玉県民会議は、次代を担う青少年の健全育成のために以下の企業・団体に賛助会員として御協力をいただいています。（50音順）

赤城乳業(株)	埼玉県ボウリング場協会	中沢乳業(株)
アゲインメディカルクリニック	(株)埼玉シミズ	日本生命保険相互会社さいたま支社
(株)アドアニモ	(株)埼玉新聞社	(株)日本標準統合物流センター
アルディージャ後援会	埼玉信用組合	(株)ハイデイ日高
(株)イワコー	埼玉トヨペット(株)	羽石電気工業(株)
浦和北ロータリークラブ	埼玉ホーチキ(株)	Humming Bird 未来基金
(株)エフエムナックファイブ	(株)埼玉りそな銀行	東日本電信電話(株)埼玉事業部
エモーショナルリンク(同)	(株)シナプルリンク	平田精工ジャパン(株)
化研興業(株)	(株)篠塚製作所	(株)広野
カネパッケージ(株)	(学)城西大学	本田技研工業(株)埼玉製作所
関東自動車(株)	Star sea	(株)マイクロミニスター
関東信越税理士会埼玉県支部連合会	(株)スライヴケア	増幸産業(株)
クリックアンドペイ(同)	生活衛生同業組合埼玉県映画協会	みはし(株)
ゲーテメンズクリニック	生活協同組合コープみらい	(株)武蔵野銀行
(株)サイサン	たっけーブログ	(株)メディアグロース
埼玉医科大学	たつみ印刷(株)	森乳業(株)
埼玉キワニスクラブ	(有)つじ	(株)八木橋
埼玉県小売酒販組合連合会	(株)テレビ埼玉	ヤマノブログ編集局
埼玉縣信用金庫	東洋パーツ(株)	(株)ラバマイ
埼玉県信用金庫協会	(株)東和銀行	(株)LIFRELL

令和7年度「絆・ふれあい」ポスターコンクール入賞作品

優秀賞（中学生の部）



「One for all, All for one」
上尾市立南中学校 2年 長岡 優人さん

優秀賞（小学生の部）



「つながれ！ハッピー！」
鶴ヶ島市立栄小学校 1年 小澤 湊太さん

優良賞（小学生の部）



「ひろがるえがお」
深谷市立常盤小学校 3年 小山内 春翔さん

優良賞（中学生の部）



「仲間との絆」
川越市立川越第一中学校 2年 岡村 柚花さん

優良賞（小学生の部）



「たまにはぜいたくウッシッシ！」
桶川市立桶川東小学校 6年 荘司 優羽さん

優良賞（中学生の部）



「新しい思い出を!!」
上尾市立西中学校 3年 小西 梨花さん

令和7年度

「絆・ふれあい」ポスターコンクール 最優秀賞・特別賞作品

最優秀賞（小学生の部）



「絆のリボン」

三郷市立瑞木小学校
6年 加藤 由空さん

最優秀賞（中学生の部）



「つながる心 広がる笑顔」

春日部市立大沼中学校
3年 稲見 志琉さん

「輝け・明るく・裕（ゆたか）に」 特別賞



「みんながたのしくわたりあそびたい」

春日部市立武里南小学校
1年 木口 恵蓮さん

「埼玉県映画協会」 特別賞



「いとこと私と光る川」

桶川市立桶川中学校
3年 宮内 梨里さん

「株式会社イワコー」 特別賞



「桜の木の下で」

春日部市立内牧小学校
3年 田中 伶旺さん

「埼玉県美術教育連盟」 特別賞



「わたしのたん生日」

飯能市立飯能第一小学校
3年 大河原 結衣さん

「テレ玉」 特別賞



「明るい花火とぼくの思い出」

日高市立高萩小学校
5年 金子 蒼汰さん



埼玉県マスコット

「さいたまっち」「コバトン」